

巻 頭 言

本論集は2008年11月1日（土）と2日（日）の2日間に渡り、名古屋大学大学院国際言語文化研究科で行われた国際シンポジウム「異文化としての日本」を記念して発行されたものである。

国際シンポジウム「異文化としての日本」は、日本語や日本文化を異文化の視点から再考し、「日本学」の新たな意義を探求することを目的として開催された。このうち言語部門では日本語が国内外で如何にとらえられ、如何にして教育・習得され、如何にして研究されているかなどについて論じられ、新しい日本語研究、日本語教育のあり方が議論された。一方、文化部門では異文化接触、異文化受容、異文化交流などについて複眼的な視座からアプローチすることにより、従来の研究では見えにくかった日本文化の側面を浮き彫りにする議論が行われた。

本シンポジウムでは国外から張龍妹教授（北京日本学研究中心）、張威教授（清華大学）、Peter Ackerman教授（Friedrich-Alexander-Universität Erlangen-Nürnberg）、Patricia Wetzel教授（ポートランド州立大学）の4人の研究者を基調講演者として招聘したほか、国内からも第一線で活躍する片岡邦好教授（愛知大学）、小林ミナ教授（早稲田大学）、ロナルド・スチュワート講師（県立広島大学）、張麟声教授（大阪府立大学）、森田勝昭教授（甲南女子大学）の5人の研究者を招聘し、最新の研究成果について発表してもらった。さらに本研究科の教員による研究発表、大学院生によるポスター発表、およびワークショップとして本研究科教員によるトルコ語のTPR（Total Physical Response）の実演も行われ、日本語や日本文化に関する多彩な研究成果が報告された。これらの成果をもとにまとめたのが本論集である。読者の皆様の忌憚のないご意見、ご批判を賜れば幸いである。

2009年2月20日

「論集：異文化としての日本」編集委員会

目次

Peter Ackerman	グローバル化時代の日本語教育	
	—文化のマイクロ・レベルに焦点を合わせて—	3
ロナルド・スチュワート	日本のイメージを整理できなかったアーティスト	
	—フランク・ナンキベルによる日本のイメージの使用1890—1940年代—	13
柴田庄一	「超近代芸術」としての歌舞伎と近代化の功罪	
	—演劇改良運動への対応をめぐる—	23
福田真人	異文化理解の困難さについて —結核を巡る言説の多様さを巡って—	33
森田勝昭	植民地支配下の韓半島沿岸捕鯨と日本の小型沿岸捕鯨文化の生成	43
涌井 隆	パーシヴァル・ローウェルは日本人と火星をどう見たか	53
渡辺美樹	『嵐が丘』の一翻案	
	—『“文学少女”と飢え渴く幽霊（ゴースト）』について—	63
Patricia Wetzel	広告にみる日本の言語世界	73
李 澤熊	「確かに」と「間違いなく」の意味分析	83
奥田智樹	文末で用いられるオノマトペについて	93
片岡邦好	口語的手紙文における字体と絵文字の指標的特性	
	—その特殊性と普遍性について—	103
杉村 泰	日本語複合動詞にみる自発的非対称性の破れ	113
張 威	中学校国語教科書に対する複合動詞の実態調査とその分析	
	—第二言語習得学習ストラテジーの改善をめざして—	123
鄭 芝淑	外国語教育におけることわざ	
	—韓国語教育と日本語教育の非対称性—	133
胡 潔	婚姻習俗と文学 —「恋」の諸相の底流にあるもの—	143 (右)
前野みち子	明治初期翻訳小説『 <small>歐州奇事</small> 花柳春話』における恋愛と結婚	153 (右)
	シンポジウムのプログラム	163
	ポスター発表要旨	166